里見八犬傳

第五輯　卷二

へ13
709
22

明治 年 月 日購求

遠 13
號 709
卷 22

南總里見八犬傳第五輯巻之一

東都　曲亭主人編次

第四十三回

義士を渡して俠輔河水に投む　葦小を射て豪傑法場を鬧せ

却説丁田町進八大塚の里老ホを召よせ卒川菴八そのかたらひ墓六が小廝額藏八主の夫婦を害しゝる逆悪既に明白ありいんや又前陣代主殺を犯したる圓塚山の強盜ゝ殺の人を殺しゝるその罪戾一よあらざれなほ彼罪人八明皆極刑に處せらるべし。背介八ある日身おろそかれバ今さゝ罪科の沙汰ゝ及ばず。曩に汝ホに須措ゝる墓六が奴婢八罪ゆゝみ舊里へ故遣せ且墓六が莊園その家庫とゝもに沒却せゝる券書によりて進呈せよ又墓六が妻の甥大塚信乃とゝ癖者八額藏ゝ丈黨ゝ竊ゝその往方を索ゝて捕ゝんめゝ

殺の賞銭を賜へん倘隠匿あらば信乃と同罪たるべしと嚴しく更へ
里苑ホハ呆果て要時目と目を指合て怺難る一両人林の袴の捻を揚て縁頰を
進み近つゝ御説でハ候へども額藏ハその夜さ墓六亀藤が撃る折遠方ありかへり
来て主の怨を復せんとハ婢女們を組知れ曩よ問せ給ひて定めなきやと
ざまし連係を怕れて張ホを再問せ給ひ相違あるべうもいつも又犬塚信乃が
曩よ嵩我へ赴くその宵ハ宿所よりあるぎ奴婢倶よりあれを誰が支黨と
いふとも且墓六が荘園も悪くハ渠が有ものとの中なる三ツハ信乃が親番作より
譲られる荘園なりを久く墓六が横領せりかれば是彼人ハ大塚氏の嫡孫なく素
より悪ずあるべき荘官なるべ由緒あれども今ハ嵩我へ赴く寵用せられざる
あるんかかり者をあるべあるを疑ひを解せしく信乃を荘官なるべ
衆人の情願り大約此度の凶変を彼人與知らぬとの證人ハいと多かり明鏡も曇

ども照さ千慮なも亦一失あるんん猶且再問再勘ありて恩赦の沙汰を願
けるとなせも果て菴ハを眼を瞪らし声を立てあるを奇怪なる奴原額藏が
罪悪ハ曩よ背介が首伏せ給ひきゝの證拠ありて脱るよ辞なれば
罪を伏せを今さゝ又誰ぞ問べ彼墓六ガ下女共ハ主の撃れ為体を露
でるも見ぬとゝ又云云といふ又誰ぞ問べ彼墓六ガ下女共ハ主の撃れ為体を露
人の首を瀆せんと謀るかん信乃ガ亦亦ガ彼奴ハ濱路を誘ひ出して圓塚
山あるく人を殺せ一同悪の凶るうハその宵額藏ガ書送せし落書よりて察せる
を悪事ずとを荘官よせを胡論の所望ハ民として守を謀るの罪
軽く再悉溺捕く獄舎よ撃ん汝ホ命を惜ずやと席を拍てゞ敦圍る
権を厭れく里苑ハ諫爭べくもあるねば阿容々と里よ立くく恐て件の趣を衆人ホ
ゆへ皆歯を切り腕を扼く更よ又浅ゆ者ハ事の趣を鎌倉へ告

訴へて額藏を救ひ給へ。俺ども八その宵のうを認るめのねども籠上が須路を
要らんとく媒妁軍木共侶ょ莊官の宿所へ赴く酒宴して夜を深せしものすれ
趣ハ誰とそもぬるものもかしこ。さるを品草へいめしくもさる立よりしどのみの酷
ょ誣罔ゆ額藏をゞ不救ひぬべ犬塚ゆの寃枉ハ爭ハぎしてかゆゞび釋ん
よふ志あるめいとく鎌倉へ赴らぶめと一人が又ハ又一人三人四人と散動く果ハ邁
ゞといのめゆ。いと言語しく罵騷ぐを里老ホ推鎮めく人々不平の述懷ハ寔ホす
あるゆかれども從今より夜を日ょ継く鎌倉ょ赴ゞも往返三十里ょ餘れるめを
翌ハ誅せらるゝふ彼男を救ひゝ世の鄙語ょふをあり長ゞ物ホハ卷ゞべし。
高ゞ物ゆゆも留ゞ一虎弊れて一虎進む籠上殿と千田殿と奸曲刻薄
甲乙ゆ今鎌倉ょ推參して領主ょ愁訴せれゞと用捨ハあょ揣ゞゞび宮六
めゆ陣代ゆ額藏ハ小廁ゞ主の讐を擊うゝもさゞゞゞ罰ハあゝん況く

ゝくも誣られるを今速ょ解んとせゞ紊れ糸を急ょ繰いゆく固く結ぶゞく人を
救ゞ身も罪せし妻子ょ歎ゞを送ゞし漫ょ早りて後悔ゆと利害を説く
諭せゞゞ里人ホハ只管ょ慍るゞを恐ゆて衆皆ゞゞゞゞゞ介程ょ七月二日ょ
ゆぬ。大ゞ大塚へ人とゞ。この日巳の尼及ょ町進ハ菴八社平五倍二ホを廳ホ聚會て
行德を船出せし日ゞ
額藏を誅戮の隊配を示ゞゆ渠ハ幻術ゞゞゞゞゞゆて卒川生を撿監
とゞ騷兵三十餘名を招くゞゞく非常を警むゞ。きのふ里老ホがもゞゞゞを
実えゞる事情を察るょ日来額藏ょ魅されく叨ょ親愛されゞゞゞ
とくょ遊行のゞゞを禁めゞ人の觀るゞを許ゞゞゞゞ某も亦武者決しゞ城
外をゞも巡らん用心かくのごくゞゞゞゞ縱額藏幻術ありとも刑ょ臨てその術を施ゞふ
よゞゞゞん籠上生ゞハその身の仇ゞゞゞの隨ょ刺留ゞとゞゞゞ
みれそのゞゞを遂く一戮ょ及ゞゞ兼諾ハ當下社平ハ膝を進めて番長の遠

慰その所以あり。あるべしとも額藏ハ檻の獣網の魚と些の法術ありといへども何ぞ
あざけ笑貴意を費やひそと誇自ら慰れば五倍二も欣然と歓びを述べ告て
おのく宿所に退りぬ。をさく准備をもうるかてまもその日も些し斜なる屠所の
ひつじあれげに急ぐぬめを時の数へとしへば獄舎より牽出さるく額藏ハ桎梏忽
ち縛の索端短なるを緊く追立る五六個の獄卒と三十餘名の野祭ハ稲麻の
如く囲ませく庚申塚へ赴けば検監卒川菴ハも信濃麻の頁衣に緘の段々筋の陣羽
織を装て精好の野袴に紋子の裾縁彩るを腰高に穿下して紫金作の両刀を
跨へて朝代の塗笠を幼短に結戴ける左右に両個の若黨を従へく錦抑箱床几を
もて奴隷を後に立て先を追しといあらくに程に後方に続く藪上社平ハ
これも身甲に針曬衣して袴の下を裾端折せて打扮きて菴ハに劣らぬ就中副
佩の一刀ハ最に額藏が腰刀の鋭刀とうそれば社平いられを掠奪りくこの日も

腰に帯ける故あるべし件の短刀ハ鞘ハ金の華桐あり中心ハ梵書の一字銘あり
桐一文字と名けり便是大塚匠作三成が年来秘藏の有試物なり女児亀篠も最
せしうち亀篠も亦年あるこ護身刀にもあらしもに最に信乃を撃せんとて竊に額藏に
貸へうと間話休題五倍二も衣袴大小刀あるべ具足ひくこの日を晴と打扮るその
装ひ社平とこれ一對ありいちのく従者ハ短錦竹錦床几を持て陸続として城を出
う既ありく菴ハホハ庚申塚に来ればこれ塚を去ること二反許年ありうる棟の下に
額藏を牽居さるまバ三十餘名の野兵ホハ列ありく捍棒を突合て徒の人を
禁やうかるれども観んと屋棟に跨を樹に登りて眺望るもいと多り
當下卒川菴ハも床几に尻をうちかけまバ獄卒ホハ額藏が桎梏を釋去て八重索被て
守てをり菴ハこれを告とくそれ額藏汝が罪科五逆に當るよりて大石殿に
下知状あり謹て兼れとうやく呼ぶけて懐より一通の刑書を取出て讀ぶまれバ額藏

頻に嗟嘆して戦國澆季の世とそ人ども日も月も身照しあり人の心は虎狼に等しく良民を屠殺してこれを名つけて法度と云善を悪と云る故に忠義を誣て五逆と罵り悪を善と云る故に奸曲を美して君子と称せむ〻東海の孝婦誣殺せられて遂に三稔の旱魃あり把梁ケ妻いく呉て忽地に城陥り寛氏の天地を動るその祟連あり汝達は是斗背の小人いまだ足るめ〻猛虎狼と打城とし〻大石殿の家風そ〻かへ〻くもあるの猛といひて果は菴八を怒れる眼尻逆立く憎た末期の擬廣言扨かいせそとくと床几をそなへて焦燥バ獄卒ホ八重括せ〻額藏が索の端を棟の枝に投りみて力に任せと釣揚れバ足ハ倏忽に地を離れて六尺あまり引登されて背ハ幹を負るが如しそのとき社平五倍二ハ衣も袴も裾取り褰げ〻身軽の打扮物〻〻ふ亀甲入る膚衣の上を高脛露して青竹の鎗を挾て勇い猛く進み出く両人齊一額藏を左右に丁と疾視く虐賊額藏天罰のがるゝ〻とハ今あるを国土の為に大犯人れを為ハ怒敵に三年竹の短鎗の串刺受るあいわと呼びけう痛し況れ額藏を屠舎の牛羊釜中の魚鼈に三寸息絶れバ萬事休人天日これを暗して油雲漢陌り走るが如し遥にこれを望るめハ潸然として目を拭ふ涙い茅が軒端に落る玉水歟と疑ふ〻又樹下の土を潤して葉漏の露歟と怪し〻介程に社平五倍二ハ合るる竹鎗琉々と素突に素扱試て左右齊一刈て額藏が脇肚を刺貫んと刃頭を引く呀と被る声あり先に五十歩許東西に稲塚の蔭あり〻〻両方一度に射出を郷音箭弦音と共に鳴渡く五倍二社平が肩尖へ揺一揺て漂と立俱に炎所を外れしかども痛に堪ねバ両人苦と叫び鎗を捐て倒れる菴八ホハ起もつやと驚ぎ〻立ちとこれバその箭に五六寸の紙牌を結提く奉納若一王子権現所願成就と書るを原来真の征箭なり。

守を否て賊を愛する百姓ども所為なわん疾疫蛇蝎として生拘れと声を絞りて下知されべらけめると駅兵共東西に立ちそれく稲塚目がけて簇々と走り進んとせを稲塚も射出を神箭は皆紛々と射倒されて右往左往に辟易を周章勝ていべらけめ。

当下稲塚推倒して顕れ出る両個の武士東西齊一弓投捨て准備の竹槍掻取く清朗なる声高らかに茶毒の酷吏駿河守を額蔵何ぞの罪ありや虎威を借て刑罰を濫り私怨をはらして忠義を凌虐は是汝が行ふ所神は怒り人は恨りさればこそ同盟の義に仗て天に代て塗炭を拯ひ虎狼を獵て人心を快くは作麼俺ども何人とか思る本郡大塚氏犬塚信乃戌孝下總滸我の浪人犬飼現八信道ぞあるなり。

とまあり弓箭も槍も王子の神室今汝が五毒の竹槍その身に刺そその身ぞ返る観念せよと罵責て槍を捻て走出れば蕃人ども駭騒て敵は箭種の喝ると彼も竜て撃仕せと胴声烈しく呼れば駅兵ども騒されて為く棒を振て逆進むを信乃現八は右に受左に拄て些も擬議はず瞬間に五六人の鳩尾中脘刺伏せ蕃人遥に見て敵は徳に両人ども猛雄當りがたければ禦ぜもあへず額蔵を奪ひ去らんとすれば彼奴を捕て結果て後を捉て逃るをあけれと腰裡に尋思つ送る竹槍を揚て遠く擲の打ちうま近つくと忽地後方に人ありて酷吏蕃人は且く等犬塚犬飼同盟の一死友犬田小文吾悌順あまり首をそせと呼留る声に駭て蕃人は阿と驚て飛揚る運歩取次まんなれば信乃現八は一岌増く骨逞しく色白く肥膚づくる大男奉納牌を結下る王子の竹槍に対して透間もなく突立れば蕃人は遠く竹槍をもて受つ拂ひつ且く防戦の程は蕃人ぞ若黨と五六人の獄卒ぞ応ず物を振て共侶に援ず撃倒さんと競ひ蒐るを小文吾は物ともせず精神まもく加りて雑立駢立進みけりその間に信乃現八は拄る敵をもひの隨に八方へ撃散し

大隈信乃
社平
大甲小太吾

法場を脇へ
三犬士
額藏
額藏
犬飼現八
五倍二

角菴八を撃んとて驀直に走来る前向に勃與と身を起す是甚倍と社平あり。
この時これを見るよりけたび角に立る箭を接捨くるを見りと接連つて寄ば欲らんと立
ちを信乃現八も佶とうんく望む讐敵ぞ〻れ漏しへせじと東西より大喝一声
嘯て懸れば社平八現八と刃をあぐ〻五倍二八信乃を拄て戦ひあぐ十合に至らば五倍六
合に刃を戛丁と巻落されく驚眸て迯んとするを脱しも遣らじ背ず股に刺貫く鎗に逢れて轉つ輾つ頻に悶苦しむを〻地上に逢留く今を後を伯母の
仇思ひあるかと罵るく拔くる尖を太刀風に首を撲地と撃落せば社平いられに舌を
掉く刃を引く逃走るを。現八透さず追詰て敲伏せ刺殺して敵迯あふ暇兵を
縱横無礙に追拂ひ信乃はあくも額藏を樹上より扶下して縛の索釋捨ぶべ
現八も亦引ひつ社平が両刀を分捕して額藏を遁与る介程に小文吾は拄る若黨
獄卒を一人も漏さじ刺伏く菴八もあちこちと数ヶ所の深疵を負しまれば迯去
つ走りぬ。矢庭に倒れく死て〻り物貝ぬ奴隷ども〻ぬく逃去て〻ふ
敵のあくなりしかば小文吾も鎗を捨て樹下に聚合ふ程に信乃は額藏を勦りて。
危かりし大川生ぶ〻ふ人又人の〻人は一朝に訪盡さんとあを衙我殿の御内人犬飼
見兵衛尤人の養ひ子和殿も孫て相識る古人糠助の実子ある犬飼現八
信道に彼は下總の行徳人古那屋文五兵衛の長子ある犬田小文吾悌順〻この
両友もこれに等し〻疾ありて彼玉を〻ふよりて日来より某を相助けて
あに和殿を拯れし歡びこれに〻ふ〻額藏は莽しく小膝を
つ〻く某何ぞの天福ありて狡萬死を出く一生を保つ幸ひのみ〻この雋傑
達に面を接せざりし日よりかつまで愛顧せられし併犬塚殿の鴻恩によりてのみ
他日の事わが身を殺して騎めも。嘯らぶと欲ひを述義を美して感涙
坐に吐ぬ現八小文吾慰めく俺門も亦幸ひに和殿と兄弟ぶ〻死宿世あり聊死

力を盡せ〜ハ素より義の仗る所みくつやく恩とゝ〜べきまゝ社平五倍二
菴八ホが残毒の竹鎗ハ天理人望に違ゆをもく和殿を害はるゝをまつ〜彼ホハ還て
竹鎗に縫れて命を隕せ〜と王子の神罰あぐべれ曩に俺們相謀て和殿を
拯んと欲せ〜るも長の器械あるにより王子村のほとりなる農家あて鬻ぐ鎗と
弓箭を買とりて大敵を殺明ぜり今ハ〜もこの地に要やゝあく戸田河をうち
渡して鄰郡まで退くべ〜誘あと急ぜば額藏まもく感佩して信乃現八ホを先に
立つて西北のかたへ足ちゆに走去ると六七町まぐ十町まハ過ざりけも浩然に大塚あり新隊の
雜兵二三十人塵埃を踢揚く追蒐ものあを獨に逃去る奴隷ホが城に還りて云ゝと
報ゝ〜べ町進驚ぢく疾行の雜兵ゝとの辭者を擊ん留ゝとて頻に下知を伝へ〜べ
食鳥銃を携うり既ゆく城兵ホハもや四大士に近つ〜ぐく前來程よく為る隨に高
頭を揃へ連掛て火蓋を切らんとする折〜俄然として降をぐ夕立の雨繁を

素して忽地火繩を滅うける城兵ホハ暴雨に度を失ぐ且く打
揮ぢ程に東ゝ然と鳴ゝる疾雷に電光して雨烈ゝかれば城兵ハいよく
騷ぢく雨を避んとて食樹下に立寄る頃の上に霹靂ゝ天地に響く
一声の雷火に震れて死るものぐとに数をぐ〜あく震死を脱れ〜も
共倍に氣絶して枕に伏ゝる四大士ハ再度の追捕に脱れ〜と思ひ〜ゝ
四下の松を篭盾に取て身ハ濡ぬ〜敵をまゝに天雷の祐あり力をも用ひと
暇の敵兵とびよれば見九事にあぐべとて滝野川と王子の神を過にあぐべきり
ゆも武運を黙祷して齊一間道を走りて戸田河まで来ければ雷ハ收り雨も
細りぐ黄昏に近かりぐ〜前面へ渡さんとて彼此とえゝ〜ほに戦国の習俗
ゆく領主の厳禁あれば渡船絶くゆ呪く雷雨に水陸の人迹稀なる折
ゆあぐべ便船せんも船をえぐ〜ほと皆氣を沼て東へ走り西へ赴

おのゝ河原を幾遍となく往返る果しなかりけるかゝる程に町進ハ隊兵百五
六十名を率ゐて馬を飛して追蒐るとも合ハ脱
るゝ路わゝんも汝ホ揮々の幻術もて或ハ王子の神助に假托し或ハ猛き雷雨を
起して戰の士卒を殺せとそれ亦非常の備あり再度の追兵を遣しる
心もとなき時を移さゝる多勢をもて囲みつゝあり追詰られバ袋の物を取るも
易かりなんを束て縛をとくく受をを呼ばその隊の士卒共声合して両を出
とゞ揚こうる四犬士ハこれをうたく河中を舟もて陸ハ敵あり進退きはまりぬ
刀の刃の潰ん限りもゞ命のあらん際りもひの隨に戰ふく陣歿もあり外に死者
命ハ是義にあらく鴻毛より軽し同盟同日同時に死ぬべ故に願ふ所あり折も
天を黄昏に道のぬゝハ影方の幸ひ備を乱さどもち寄せぬ奇をもて中を
割ん目さゝ讐敵ハ十田の人馬の足を立させと送に諫將ハ死の覚期勇しく

立つく敵をまつ折ゝ誰とゝもゝゝ水際あり繁茂高蘆をあり。漕ある
岸の舟のあるをゝ秋の川をを誰ゝゝまいく歌ゝゝゝの岸へもゝも船を
あるめあり四犬士これをうたくて彼も敵欲と訪ゝ簑笠着る一個の舟遠く
招ゝく刀祢門ゝく乗ゝゝ樵萬夫の勇ありとも敵の多勢に比べ九牛の
一毛ゝ可惜命を捨んよりもくと勧めらゝ行ざまへ神宮あり猪平に似てゝ信乃
現ハ小文吾ホハこの人をゝを知りく天の祐と憂時も猶豫せゝ額藏共倍身を跳
らと船に入りとゝも乗れバ猪平ハ櫂をとり伸て岸をゝくく船を返ゝ後を
呼けゝ町進ハ真先に水際に馬を騎居く鞭を抗て招けども猪平ハ耳ゝもかゝ
船底より簑笠を四ゝを取出と四犬士に遠与しゝゝ折ゝ逆風あれバ信乃
漕とゝも速ゝこの船を前面の岸へもゝゝ雨ハ甚ゝく霽ゝれども敵の箭を禦ん
為ゝくくゝゝと懇に勧ゝバ信乃ホハまく敬ゝくゝひゝゝ猪平更

吾黨七この危窮をのがるゝ知らるゝ神速微妙の援をそとのへば猪平含笑て
ものゝ理りを刀祢丸いはく比小人ら宿所を辭去りて南を望て起たゝしの
道の程心りとなきれ竊よ迹を跟て邁しよ刀祢丸ハ杜岡の[illegible]ゝ要時魁ひ
[illegible]その折の密談を圖らずも竊ゝよみを同盟の義よりて額藏とを拯んと
死をゝ辭せざる武勇謀畧滝野川ゝ辯天堂を旅宿よせんと相譚あひしその
智その勇大なるを[illegible]島傑達なるといへく認て憑しく又慕しも一ト[illegible]
よりて宿所よ還りて[illegible]彼人々ハ額藏男を拯とゝんと謀るとも城中の守禦
嚴重なれハ獄舍よ潛び近つけ竊出さんとハかるべからずかれバその刑罰の日
決場を劫して奪ゝ走らんとそ謀るゝめづれも不敵の豪傑なれバ本意を
遂んハ必定なれども其処より城へ遠ゝぬよ再ゝ暇の追兵を出ゝこハ寡よ敵し
なゝ縱追兵を殺崩しし且くハ走るとも近傍この戸田河ゝハ渡船稀なれハよ

至りて追詰られんのゝその折よ拯ずハ可惜義士を殺しなせんと思ひまよれバ密々ふ
滝野川へ走りてその進止を窺ひ又大塚へ起りて刑罰の日を向定めるゝ
船を彼処よ走ゝ刀祢丸ハ彼頃の雷雨よ黑白を別ぜるゝ刀祢丸ハ
あもゝと水際を徘徊あひけんとも知らぬゝ且くも物をゝハせしのゝ今
些遅々せバ敵よ咲笑られつゝ危かりしと村膽の心の誠をゝ諦ゝバ信乃現ハ
小文吾ハいとゝ感嘆して猪平が任俠義胆を額藏よ告るよん額藏も亦
感佩してその恩信をゝ欽びる既よして船ハ稍北の岸よ著よるれバ四天士ハ曲々よ
欽びを演るよ暇なく猪平を見ゝりて皆再會を契て躍ゝ水際よ立けり
介程よ町進ハ士卒共佰よ声を揚ゝ頻よ船を呼禁れども舟人ハ応ぬ態しゝ亦
漕ゝ出ゝ敦圉悍く彼射て捕ると下知されバ雜兵凡
四五十名おのゝ岸よ立並て箭継早よ射被れども間遠なれバ箭ハ徒よ水中よ

落るとおぼへ流れたり。○町進ハこの光景にいよ〳〵悪罵りて、ひとびと兵共小卒を
鏖残害して死刑の囚徒を奪去る虐賊ホを撃漏してハ、われも亦死れかし。河幅ハ
いと廣けれども、このところハ浅瀬ありければ續けとのゝ被らへ馬を颯と乗入れバ、早
雄の士卒六七十名僉後れじと渡したり。されども夕立雨に河上より落る水おほくて
高けれバ士卒ハ左右なく渡しえず、或ハ弓を杖につき、或ハ臂を連て相扶け推流
されじと喘ぐ程に、町進ハ只一騎、馬を河の中央まで卒して進むを、猪平ハ遥に見て、○
遽しく船底より弓箭を取出し、能引固めて矢声をかけて、丁と發せバ町進が乳の
ほとりへ箆深にぐさと立しかバ、札も見えし裏鉄までに至りて撥
投捨てを進まする。猪平ハ一の箭を既に射損したりけれバ、只顧にあせりて膝て二の箭を
矧んとする程に、怒然として一個の壮夫、水中より浮出て、町進が衿上へ抓み捧を甦と
うち被て仰さまに引落しつ、腰なる刀を抜出して、押へて首を取てけり。その水中の

疾働き、目さましかりけり。○件の壮夫ハ町進が馬を奪ひて水中まで
閃りとうち跨り、後れて渡さんとせし雑兵を抓子棒を以て引倒し、突流し推沈れバ、敵ハ
忽地辟易して舊の岸へ逃登るを追ひつゝ、馬を乗上たりけれども、城兵ホハ水に濡
れしも陸なる衆皆岸に踏留りて推捕篭てぞ攻立る當下、蘆原のほとりより又
一個の暴夫突然と顕れ出て、横鎗を入れしかバ、城兵ハ聞騒ぎて乱騒ぐを
惣と長柄の鎗の刃頭尖く、敲伏せ刺殺せ、千変萬化の働きも勇士ハ獨り両人なり
城兵ハ既に大将を撃れぬれども有繋に大勢なれバ、退くもあり進むもあり、嗜
叫て戦ひたり。○四犬士ハ北の岸にこの両勇士の働きを瞬もせず眺て、四士齊一感嘆して
水際近く船を歇し、猪平を呼びかけて、乱るゝ世の習俗とて弱を助けて強を折く侠氣の
あるなればあらしかど、老人のいひしは稀なる彼両個の壮夫ハ何人ならん、名をこそ
あらね俺们を拯んとて欽仇を殺して、今日大敵と戦ふ光景、世に珍しき勇士なり

ヤス平
力二郎
町雄
尺八

戸田河の四大士
ぬまとび
窮厄を免る
ヤス平
力二郎

事情ハ吏員をあくまでと訝しくいと久べ猪平微笑く彼ホハ曩ホ苦ろ〜力三郎
尺八〻小人既ま老れバけふの剛ま相譚ま兒血氣ま早さめどもかるホ豊嶋煉馬両家の
為ま怨を復さんとあかもろあれバ大塚の陣番ホを〻憎ゆを甚しゅうして異議ホく
同意して彼ホハ蘆原ま躱てやり機ま臨ミ変ま応して町進を敷ま捕ろうとホ信乃
ホハ驚ま〻くあるべ又彼両勇士も命を惜まど難ま代る我ホ〻ろま恩人をもろも更ま
いと親犯族ありと狡笑ろホり陣歿せば悔とも甲斐ホしその殃危を他ま譲りて
苟ゆも免ろハ勇士のせざる所ありく滝竹ホれを恥ろの船を疾ま巻へ再蘆の難へ
渡し生涯とも死ゆるとも安危を彼人と共ません今さら躊躇どろと言葉等しく
急ま猪平頭をうち掉く否この船を寄ま〻べ義を〻く勇む力祢竹北
志ろ〻べ〻れども彼ホ〻敵と戦ハ力祢竹を落さん為ま然るを再彼処へ渡しろく倶ま
陣歿ホ〻ぐ此彼共ま力益ろ〻ろ〻ゆ壮佼共が町進を敷捕ホ〻ホ〻ま

して遂ま命を隕しやせん匹夫の勇を是非ありやようち乗て落ゆさぶれ彼ホも小人ま
只侠氣を旨として今力祢竹を救ま〻ま世の豪傑とゆまり命ま換て頼人
と欲ろとのあれ〻ハ委ま〻ま状を音音ま届ゆく彼ホ〻ろ〻も小人〻ろ〻
定ろホ〻ろべし今力祢竹を渡しつ追兵を禦ゆれバ神宮へ還りかし。
況彼壮佼ホを先亡るとあるバ誰を便著ま立潜ひく餘命を何処ま貪ゆ〻ろ
限りの浮世ゆと豫て覚期を究やろ絃ハこの船をあらま流さバ力祢竹の又渡しゆん
ひ〻ハ敵ま〻ゆ〻ん身を淪く赤心を顕ハ〻べ〻ひ〻ゆ〻ゆ〻
河中へ漕ゆ〻ゆ四大士ハ〻ゆ〻ろ〻ゆ〻ゆ〻且感し且驚く水際ま足を翹てやま等ゆ〻猪平
更いまと趣理りゆれども更ホ三人を見ろ〻死して何地へ落ら〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
枉く且くゆ〻ゆ〻と異口同音ま呼禁れども猪平ハ応ゆ〻で河中遥ま漕退け豫て
准備をゆ〻ゆ〻船底の栓を引抜捨れバ船ハ底ま水入りて人を乗ゆ〻忽地ま

波の下に沈とける四大士八法然と刀刀目届ぬ薄暮に戦ぐ蘆の葉さゝぐ〳〵紀。前面八修羅の大刀音矢叫びあせくハ処也河風に澳より熱む宵間の其処ともうべ有りかをしかども四大士八捨て走ふ忍びぜしく有り悵然と立在しを信乃ハ甚く喜び久しう忽地に声を奬して時ありかれ命ありかも必死を極めし俺們ハ両三度危窮を脱れて喜び久けあれ猪平ハこの河中に投て死せり且両勇士の存亡も目今見定めがたし然バそ云云まこの小節にかづらひく河原に立て曉ぬも死しる人の返るまあ〳〵勇士を援助為やもあ〳〵猪平が俺們よいひ送せーよを〳〵荒芽山まで赴ラバ恩に答るまんがもあ〳〵誘ひ人々に通宵走りて無異を料らんとて誘ひ立れバ現ハも亦小文吾も寔に然と頷紀ふるを額藏ハ遥に信乃を見久りて彼樊噲が大功ハ細謹を顧ぜ大礼ハ小譲を絆ぜと然ひしを〳〵ハ猪平が入水勇士の人ハ尤惜むに勝れども水を隔て歎紀しハ

それもげに女々しかりを相愧て現ハ小文吾共伴にちつれ立て野干玉の闇のあれど猶も世を忍ぶに似る岩しろの蕨のくさま起紀り。

第四十四回　電電の社頭に四雋會話を　白井の郊外に孤忠雙言を窺ふ

走るものハ路を擇まで貪紀ものハ妻を擇まで餓るものハ食を擇まで寒紀ものハ衣を擇まで。その時と勢ひと人情まで如の如しさる程に信乃額藏現ハ小文吾ハ上野信濃を心當にその終夜間道より只管に走れども比ハ七月初の二日黒白も別ぬ烏夜の明ばバ邁と五里許の遠く忽地山路に迷ひ入りて〳〵程に天ハ明ぬ。

帯の間ありして西北のくを直下せバ寂る人煙迥に見えぬり彼此と徘徊るに山に荒る神社ありて華表に掲ー匾額に雷電神社と以四大字ハ定りぬ

讀れ方信乃はつくづくと瞻仰く諸賢八はあぐ亮ひぬるもあり八桶川の東南なる雷
電山は疑ひ彼方なる人煙八是桶川の郷なるべきのみ八亮ひ分けがたくも庚申
塚のあるさまを神雷の落かゝるまく暇の追兵を拉れし八世は稀なるべき天恩とかくて
昨夕八途は迷ひて今ようやく雷電の社頭なるく天の明し八因あり縁あり奇なるかな
ひは有理と額藏ホ三士も齊一瞻仰つ且感し且尊ミて石階を掃ぶ朝浄水もあく
社壇ホ額つ跪く俱は祈念を凝し竹り且て四大士八樹下は退ぞく又彼此と八さ八ふは
神社の背は棗樹夏かり菜萸楊梅も少くぬるみをよく熟して半八落うり貯て東と
茱萸を採て飢は充るホ其を凡常は過だり忽地は疲労を忘れて心地清々しく
夕陽八西山腹八もの〻〻朝日の影遅れば樵夫牧童もあり遣ば鳥八緑樹ホ
隱れて声ひゝく高く雲八青空は起りて遺いまゞ定らぬ現静け此八山の德なり
名山靈峰ぶれ八あれど時はとりその佳境なるを皆共侶は嘆賞して或八石は尻をけ

或八朽幹は身を倚く迭は相譚ひ慰めけり當下額藏八恭しく貌を改めてきのゆ
を支の慌しくて曲は欽びを演ぶれ人迹稀なれば密談は究竟のいぶ物臆を
盡ぶべし犬塚ぬし八何ホの故は滸我は留りぬるぶる況犬田犬飼の両友をさへ相伴て某が
必死の尼を拯ひ為体不思議とのもあるべしつくづくとこれを
信乃八含咲て曰ふ八理りに某も亦滸我ゆく免れ難き大厄ありこの故は下総なる
行德は流浪つゆゑび危うきを幸ひ三四の豪傑身命を擲く遂は窮阨を
釋れうその故八箇様々と彼村雨の刀も失せしまゝ又現八と組毅して滾て船は
落うり文五兵衛と小文吾ぶり妙真房八夫婦ぶり大八の犬江親兵衛ぶり、大
法師と蜑崎照文ホぶり伏姫の縁故珠数のり八房の犬のり里見は宿因
あるとの槩略を示ぶ現八小文吾も迭代はるの漏るを補ひ額藏八少く毎ホ駭
然としてうも驚ぬ潜然としてうも歎く房八ぶ義烈八さ〻く親兵衛ぶ幼稚し〻く犬士ぬ

一人ゝを喜ていとゝかしこくやゝあも文五兵衛妙真が心操の大ゝかぬを嘆賞して
声を断ぜ且、大が二十餘年の行脚の勤苦又照文八母の為ゝ従弟照武が子ゝ
その宿縁を感悟して哀歓交みづゝ禁ぜ〻いんも亦現八小文吾が孝順義勇を春
愛ていの骨肉の如くゝりその〻紀信乃八又いのゝ某行徳よあゝ一日八舊里の凶
変を夢ゆゝも知らざれハ竊ゝ和殿ゝ對面して事の速を報んゝ犬飼生共侶ゝ船ゝて
犬田ゝ送られく神宮の岸ゝ著ー折漁者猪平ゝ呼留られくもゝ伯母夫婦の
横死と和殿の忠勇非法の禁獄詳ゝ伝ゝ聞ゝ犬飼犬田と密談して滝野
川ゝ辨天堂ゝ七日計参籠して云云と謀りつゝ逢ゝ和殿を拯ひ奪ゝ加藤猪平
尺八力二郎とゝゝ人ゝ援あり既ゝ恙なく四方面を接せゝ歎び何物ゝ
べ紀あゝ里見殿ゝして微聘の沙金ゝ蛮崎生の懇意の隨ゝ某且く預りあるつ
受納めひとひゝく懐ゝ財布を携くゝ下包の沙金を遽ゝ与ゝなん

額藏八謹く受ゝ紀くゝ左右ゝく約めゝ某ゝ里見殿ゝ一介の功ゝ和君達
と屑日ゝ某ゝ故をゝ纏腰の費ゝ是ゝの後進退八和君達と共ゝ
ゝ財ゝ分ゝ本意ゝ犬塚ぬしゝ領ゝ
推辞ゝ信乃八頭を掉く刎頭の交ゝ介意ゝ某ゝ和殿のゝ蛮崎
生ゝ辞ひしかども云云の議ゝ諾ひうゝ功ゝ皆ゝ和殿ゝ賜
物ゝ紀ゝ預措ゝ紀ゝ後纏腰ゝ
ゝ曩ゝ彼殿の懇聘ゝ同盟全くゝ納
と謝ゝく額藏八遂ゝ意ゝ任ゝ沙金ゝ懐ゝ挾ゝ嘆息して現八今
ゝ玉の文字ゝ我ゝ過世似ゝ八人ゝ紀ゝ大江氏の子
ゝ八人ゝ就て又一奇ゝ曩ゝ某ゝ圓塚山ゝ二個の
犬士ゝ撞見ゝ故八如此々ゝ信乃ゝ栗橋ゝ別れ一日千住ゝ日の暮れ

○ 路をとり謬て圓塚山を過る折左母二郎が村雨の刀をもて濱路を殺を條より大山道節忠與が左母二郎を砍倒して濱路と名告合て且濱路ハ道節が妹なりしその父の母の濱路が義道節が孤忠一五一十を竊聞せしその趣又道節ハ村雨の刀をもて亡君煉馬倍盛の仇管領扇谷定正を狙撃んとすれども濱路が需よ忘ぜざりしを濱路ハそゞ侭息絶しを道節が火葬せしを緯果て額藏ハ村雨の大刀をとり復さんとく道節と挑戰ひ折守護袋を道節が刀の鞘よりかぐめしく遂よ渠が取りをとしを又道節が肩なる瘤を一撃撃と砍しを金瘡口より悲散る玉の怪しくも影ゐ入そこと彼玉をとり換るその玉やを忠の字あるを道節ハ火遁の術をもて竟よ逃れ去りしを。介後額藏ハ左母二郎が首を木の杪よ斬梟て云云と書送せしハ濱路が為よ人の猜疑をあらせじとその為なりしこれ町進ホが潛匿を資しを大約事ハ

顛末を曲よ告て又いふ某禁獄せられ日水火の苛責痛楚よ勝ず心地死ぬべう身をもて捨れバ杖瘡立地よ愈てその痕ばかりもあるこの故よ町進ホハ法術あり疑へりこれ亦奇妙といふべし。これ亦と遠しく誓の中よ藏しを玉をもて知ずホせ。○まのあたりこれ亦と遠しく誓の中よ藏しを玉をもて知ずホせ。○信乃現八小文吾ハ共倡よこれをもて嘆賞声を合しを當下信乃ハ法然方驗を[illegible]ばき[illegible]くいふれバ吾黨よ有縁の婦人ハ悲薄命かくのごとくなるを伏姫ハ[illegible]人ハ[illegible]ば権者の後身ともいふべし欲ありしもその終焉の為体を[illegible]ばいと痛且阿沼藺といふ濱路といふ才貌節義の世よ捷れしも廿歳のうへを超ずして皆これ非命よ終を取りし不幸これ甚しかず且濱路が真の親ハ煉馬家の一老臣犬山道策なんやとの素生の賤しかず某曾彼女子の縹致十二分の趣あり婢娟なりしを惜むよあらずその節義よ勇猛なる婚姻その期よ及ばバ一夜の情も被ずして某が

為よ節を守りて百年の命を捨し心操を悼むべき幸ひ犬川生その霄彼山路を過ぎ。これ誰か最後の為体を認めて報知せん某諸賢の資よりて名を揚家を興せ。又正妻を娶ずして子孫の為よ己とあくハ妾のみを事足りんこハ彼義女のあるべき。古人寒食足下の微意を奸佞人ホよ謀られて亡び村雨の大力ありも彼犬山道節とそ。

[illegible]

姓氏の犬山ありて且この忠の字ハ玉ありて名を忠與と称ぶとハ犬士ども疑ひ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

実父の名を知るのみなびもてめとその墓を祭しハ犬塚生の恩信よあれり然れバ犬田共侶よ同盟の義を八和殿の母前の貴亟所行婦塚を祭りしもも両三度ま及ひ。

これよりて再ありよ彼犬山道節も過世の兄弟なり今ハ往ありを[illegible]環ありの日のあるべきなり。バ小文吾もまたあるべし。九同因果の六犬士ハ多く親同胞あり。出生の地も同じかるべきその氣俱よ相通して真の同胞ありをあべし。さるまより犬川生ハ玉を道節と相換へ[illegible]その玉の奇特あり同根同氣の感ずる所これを徴とせバ又何をう疑んや犬山林房ハと猪平ホの三四の義士ハ[illegible]因果よ深浅ある欣犬士の列よ入るとなるべ。[illegible]化も房ハそその子よ犬江親兵衛あり只猪平が任侠ハ因縁悟易ふ[illegible]且力三郎尺八ホ勇悍の壮侠ありふ情しや陣歿ぞ[illegible]ん欣彼ホハ三人命を換て頼むとのひしハ何ぞ[illegible]ハ多く鮮しかさし犬塚ぬ[illegible]を向ひて信乃ハうち頷ひ某も[illegible]猪平が所望のもの[illegible]ハ暁知るべ[illegible]倩と思惟ふ渠ハ本姓[illegible]雪と舊名ハ世四郎と呼れうとみつ[illegible]り某が畜犬のその足四白ありとそ与四郎と名けるあり彼と此と同訓文世の常言よ雪ハ犬の姨と欣ひ。その氏の姨雪ハ亦是

犬の縁あり形ばかり且力二の両字を轉倒せば便是方となる又尺の字のへを上にすれば便是戸の字あり又それを全聚すれば房の字となるやそ尺八の八の字を房の上に冠らせれば八房の二字となる強幸傳會に似たれども亦是犬の縁あり後に因縁の定りあるべし今の急務にあらざれば且く度外に措ねといふ意然し妙論は小文吾はまうこ額藏も現八も只管に感服しその才幹をぞ稱るかくて又額藏が腰刀を右手にとりそれを信乃に示しそいかゝうきのふ庚申塚の侵とりあく犬飼生の精悍く社平が両刀を分捕して某は既り死をば紛糸の折れざしも心つぎうしを今朝にそくくなるこの腰刀は比栗橋の宿りにて密謀に和君にうせやあるうせし桐一文字の名刀といめる六月十九日の夜鶏上宮六を撃留て五倍二の疾を負せしこの腰刀をもつてせり某囚徒とあり比社平が掠奪うあくんかくて又循環りて某がふ落しるる亦是 奇しといふべし。されどもこの桐一文字は和君の祖父

匠作ぬし先祖相傳の名刀とそ亀篠とあるは授ぬし来歴は云云と定りあるとあるとば。和君の名はは茂陵の千金これはおぼえの何ぞあくん某は社平が大刀あり。ゴロあくと事足れり彼村雨の名刀は道節がふ落れば今請復せふすもの形を和君は讓あらん藏めもとさしあるとば信乃は欣然として左右のまを受取て。義あるうの犬川生ぞ伯母附属の刀をもて當座は仇を撃しをいと羨むべき績なれ某滸我を危難の折大刀を喪ものとなりて腰刀をえ打折れば行德へ著一日は腰は寸鐵を帯ざりしを大田生があるありて所藏の両刀を贈りあひしきのふ五倍二を撃留て鋭鈍を試しふ現技量の鋭刀なり鞘は金の臥龍あるく甑も又紫金魚子は金の雪篠を置なるめの両刀の表裝一對之既まこの両刀あれば事足るべしども桐一文字は先祖の重宝有繋は捨るべきあり厚意は任してこの腰刀と相換て胥は帯べしまあるべきことを進らせん納めもと正首はるが腰刀を贈りはければ額藏は受とりそなへ眉根をうち

せく某六七歳ありしとあるこの表裝をもんく推量こふ垂銘
なれども左文字は似く刀尖は班ハいつぢゆ大刀も垂銘はいつぢゆと問れて信乃ハ訝しげ
なるいろく知らるるいろ如く些の班ありて両刀ともに垂銘はなしと又ハ額藏歎じて
扨も不思議の事哉某ぐ亡父犬川衛二ぐ年来秘藏の両刀あり鞘ハ云云鐔ハ云云垂銘
なれども左文字なりしと母の折々説示されしを耳に掖えて忘ることなし今この
腰刀もなれば父の遺刀に彷彿たり雪篠ハ家の定紋刀尖些缺たるハ是ぐ父嘗て獵を
好み一日矢傷野猪を刺留しに刀尖餘りに側の石に刺さりたりければなるべく
班ハいでぬ後父ハ堀越殿足利政知の敵政夏慾を諫めかねて忽地自殺なる
彼両刀ハ没却せられし何人の手に落たりけん往方もなきぐ母ハなりくれ
もせくうち歎じぬるも今ハ昔はなりかしを憶ひぐ父の遺刀をなれば秘しく
又哀しきは一ほ遺りし犬田ぬしハこの両刀を何人より買とりて犬塚ぬしに贈りぬ奇

ありくと感涙をおびぬ嘆賞を信乃現ハ小文吾ハ又この奇遇に感佩して耳を
傾け目を指ふく齊一讃嘆をうるぞ中に小文吾ハ小膝を撮とうち鳴らして恰も禍も
三年侯ハ福はあるとぞ塞翁の故事ぐ一昨歳の秋の比某ぐ識る賈人その両
刀を携来て拾貴はをうとも三十金ハ必ぐ名ぐ只今火急の要用あれば價十
五金をもぐ進ぜんとぞ欲けれバいろく隨に買とりて親文五衛門
告ぐ故ぐ訖ぐ眼を睜りそ家初代武士なれども今市廛に世を渡れば彼も町人の子
なれば身をその身に要ぐ物に十五金を費ぐ愚なりぐ舊へ返せと申られしを
惜みて秘ぐ犬塚ぬしに犬塚ぬしに初見参の牽出物とぞ贈りけるに豈
ぞんやその両刀ハ犬川ぬしの家尊の大人の像見の名物なりんとハこれ禍も三年侯ハ福なること
の世話に相似く面目ありと歎くとその偽来をとぞ諦ぐ額藏ハまもく感じて涙くぐ犬
田犬塚両友の既に有かを辱し世に亡父と今ぞ相見る心地ぞとぞ驗を

あざこけば信乃ハ又腰なる大刀をぬきて右手に接取て犬川生々々この大刀とそもさぶ物
なるぞ社平が大刀と換ゆ桐一文字を恵れんバ一刀ゆゑ事足れども和殿のあるを
休る為に武者の戦場に敵を撃らる分捕の剣戟をその子孫に傳ふバ子孫に尚目
と某社平を撃ぶしとも五倍二とその悪等ハ集も讐敵の半隻あれバとを乞く
腰なせんあ古人髑髏盃の獷猛に勝れるとありしぞと勧ゆバ額藏ハ辞ぜして
両刀俱に換てやり現ハこれをそなへ人義を以れに贈ゆバ人又義をもて必酬ん大田生の
牽出物ハ犬塚まり犬川と三傳して舊に返ゆり世の人ハ只眼前の利のみ走りて義に疎
かりあるとそ酒食の支のみ生涯信友に遭ぬあるべし今三刀の奇遇をうそもその宿因の
深ぶを知るべし子孫の美談とせんとそこりくと頻に稱賛をそうしうバ額藏
いかゞ契びく某諸賢の助まおりて萬死を復せのみかけやうして小厠の苦役を
免ることをなりむし総角ありし比竊に犬塚ぬと謀りく名字を莊助義任と

改これぞ主の莊官に憚て世ゆ披露せざりし今もろ〳〵もるゞ父の像見の両刀を恵れ
ゆバ額藏を改て犬川莊助義任と称ゆ額藏と莊官の漫に名つけし字に今
さら契ゆバ不祥の義あり額ハ則比太元と訓て額藏と熟ゆバ
額藏ると訓をして世を潜ぶ貌あり又死人の慎目に似り果して不測の罪を招く
世をあぶなきとてけれさハ莊助の莊わるく助あるゆをとゆ改名の趣意かくの
如しとゆバ衆皆諾ひくあるべしと応つこの日あり額藏を莊助とそ稱ゆる商量
既に果しゆバ信乃現ハも共侶に小文吾よりも對ひて曩ゆもあるく勧めしとく
和殿ハ行徳へ還りゆ假初に送りゆるく
さぞ待ぶあんぞ加稱前諾せし大道徳と蛋崎生に約を違るに似て快く
犬川生を拯ひゆられバ遠慮ともあるべし還りゆと促せば莊助も亦意を演く
俱に帰郷を勧ゆる小文吾ゆぞ後ぶいつく趣よりあれども行徳ハ無異ゆてあれ

為安うゞ荒芽山まで送りとゞけ給へ。こゝ一ての後は袂を分て人世の鄙語やも仏を作る
とゝも易く魂を容ることは最難しとゝ始めて終あるもまた大丈夫とぞ
べうゞ猶平ゞ云云とゆゝしくもあるかな荒芽山の光景はいかゞ見果でしゝ
る処より帰去らば彼佛を作るとも魂を容ぬる似うも再び勧めあるべしと強て推辭
しゝ信乃ホも遂はせんとぞ思へども躰の意は任せ難く果しなく長談は秋の日景の
傾くを覚て下晡はなりしゝ四犬士は又商量して艇浮世をあくまでもこの深山は露
宿せば猛獸毒蛇の愁もあるべし欲今宵は桶川は宿投べしとて齊一身を起して
又神垣をぞ伏拜む別雷の名の負は武運は甘雨の降ごとく武名は雷霆の裏く
ごく隈なく天の下にも播さゝ給とあるく要時黙禱して又彼の木果を拾ひ
飽まで腹はみつ栗の中の細道踏ゝ分く桶川の郷へ下りけり却説信乃莊助現は
小文吾は次の日旅宿を夙く起て笠深くして程はさしも急ぬ旅なれば世を潜めも

甘樂郡白雲山明巍の神社は参詣を明巍今は明巍と作る若夫明巍山は白井城の北隅は
在り其西北のては碓氷郡を背ゝ南北は相對へり僧正尊意の
所開南朝名臣の隱ゝ所歴々として古蹟存焉千年成阪陰は二十有八層ゝ
百六十層ゝ四阪五坂升降は深谷の地を帯る崖岸の狀を見れば鑿ゝ
穿ゝ如く高嶺の天は横ふ崗巒の勢をも仰げば高く削るに似たり煙
霞の子細ゝ泉石の分明ゝ実は天上の靈奇ゝ人間の妙絶ゝ神殿搆ゝ
咨へば地主神を波古曽と號け本社を妙義權現と唱へ隨身仁王總門あり神明
宮日本武尊満宮稲荷神社辨才天飯綱不動觀音聖天大黒天金毘羅人麿
禿倉あり本地神樂護摩の三堂繪馬掛の四阿あり香水及菅公の硯水あり救
舉るは遑ゝ神殿佛宝久て戦國境季の世とは乱妨の兇徒あるこゝ又ゝ

名蹤奇峯を問へバ仙人滝大黒嵓地蔵岳塞河原阿弥陀岳大日岳弯反嵓金剛峯釋迦岳天狗岳天燭峰高籠巖五臺峰金玉峯あり俗よこの邊を奥院と

○けんぎん

いふ険嶮なる靈嶽を仰瞰として向上れバ萬尋の青壁ハ凸凹として遥かに空洞

なる幽谷を競々として直下せバ千仞の緑苔ハ穹宵として瞑眩く葛藤の挂るハ人

ひとあをれおよのげいぐうとぐ人迹罕よ及び荊棘の藏る所鳥路徒よ通ふその奇その妙面あらう目よ見耳よ聞く拙

○ゆめ

から夢よ似て夢ゆもあらぬ現ゆゝ現ゆゝ

せんとそ左思が十年の苦を積ともいぞう拙毫よ及ん目今あよ説出せるハ是明月の

前ゆゝ左玉を採る類ゆゝ斯有ゝ

○ゆゝ

四犬士ハこの靈場を巡礼して或ハ躋り或

躋る隈なく遊観する程よその日も未下刻よ

雲時尻をうけく疲れ足を休ゆよこの茶店よ遠眼鏡あり

○ゆゝ

蓬ゆよ居ゆる侭ゆゝく放よ客よ貸ゆり莊助ハ戯れよ遠眼鏡を

○ゆゝ

直下せバ毎ゆハんえゆ麓路まで鮮明ようとそうゆ浩処よ蘭織笠を戴

○ゆゝ

ゆる一個の武士總門のあゆゝゆる溪川の橋をあゆゝゆふゆゝゆゝ邁ゆりけり

心ともなくゆゝゆよ闔らぬ後方をうえうゆゝ本社のゆゝをゆゝも仰ぎ俯面

影ハ笠の隙ゆゝ犬山道節よ似ゆけをゆゝふ瞬もせず目送るよ

總門の外よゆゝ往方もゆゝけゆゝ送憾なと限りもゆれバ只顧ゆ

嘆息して信乃現ハ小文吾ホよ云云と密語バ三士も俱よ嘆息して久

かるゝよ眼鏡を採ゆ直下せども遂よその甲斐ゆけり當下信乃ハ沈吟して

遠眼鏡ゆ見ん人よ追着んと欲ゆるもの処ゆ總門まで一里四町ありと欲

ゆバ鳥ゆとの及ぶべきのふ巷の風声を聞ゆゝふ管領扇谷定正ハ

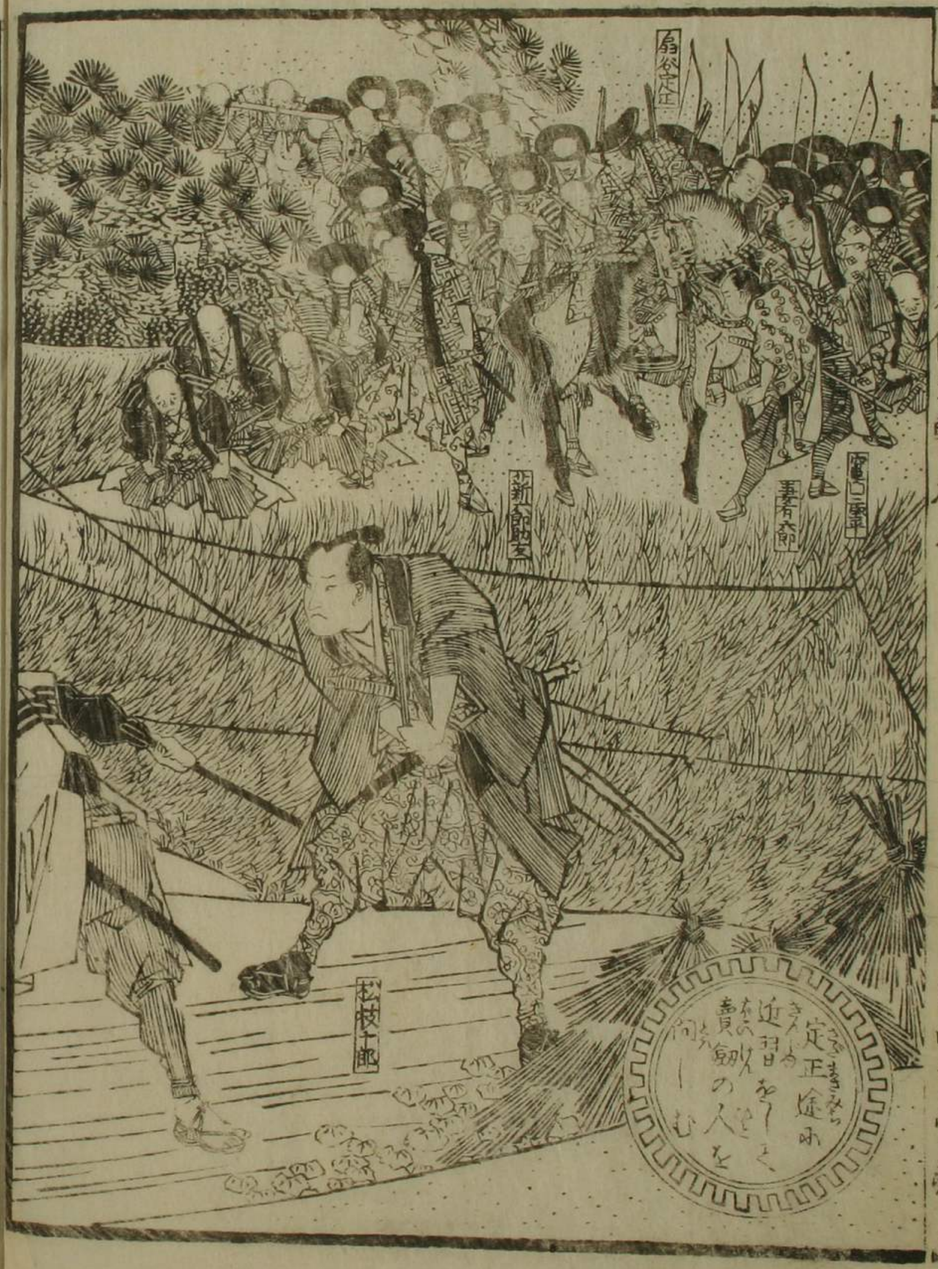
近属當国よ退居して白井よ在城ゆゆとゆゝ彼道節ハ両管領を狙撃んと

欲ゆゝゆゝゆゝ人ゆを渠ゆ亦ゆゝゆを徘徊して隙を窺ひ時を待ゆ

君父の怨を復さんと謀るとあるべきなれ彼をも推量るに犬川生が見るに武士ハ道節のみを疑ひて誘ひ下向して白井の邊に趣く萬に一つ彼人に環あるともあべし。とくくと急せば莊助現ハ小文吾ハ一議に及ばず同意して其夕又領内をもつれ立て足一の山本見えく遠妃千々の石階落ちが如く足に信して下向せり不題管領扇谷修理大夫定正ハ近属山内顕定と不和なるゆゑ猛き鎌倉を退妃て三野白井に在城せ當国より信濃越後まで定正の采地なるべをさく人馬を調煉して不虞に備へ為の冬。これより定正ハきのゑ五日の早旦より砥沢の山に狩競しく。明応六月の申の比に白井の城に同旋せ定正その日の打扮ハ紋紗の狩衣に精好の袴約皮の行縢穿て金作の大刀に兎皮の尻鞘を腰に跨へハ八分反の武者笠を戴き奥州驪の太逞妃馬に紅の厚總掛く磯馴松に月と衝を銀の磨白なる鞍四下羞明く皆具して紫の勒擻繰て馬上優に歩行せり相従ふ近臣ハ

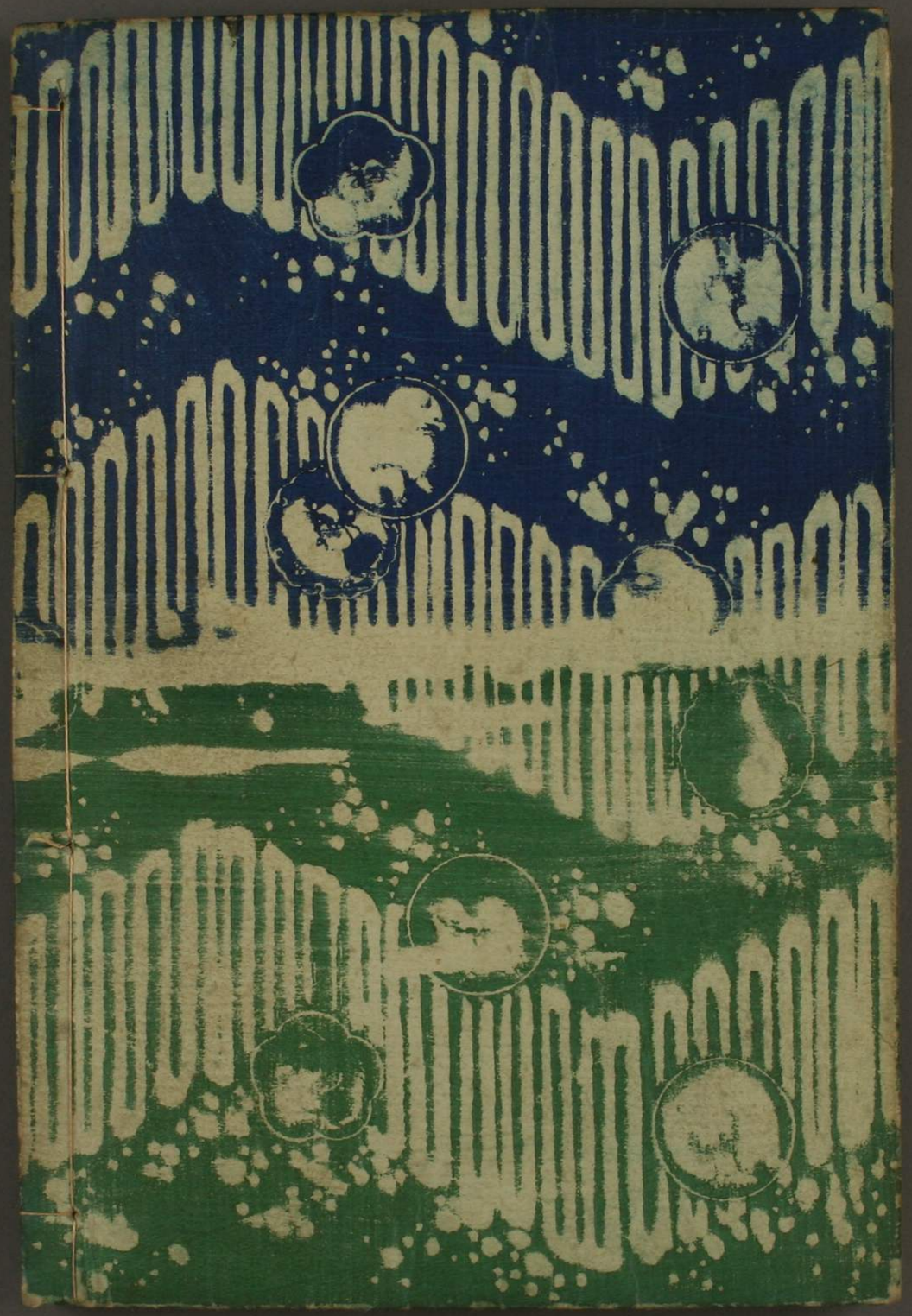
巨田薪六郎助友竈門三宝平五行妻有六郎之通松枝十郎貞正ホ従類凡三十五名外様の若黨五十餘名又弓箭鳥銃を肩ぶせし雑色奴隷に至ハ毛拳るに遑あらず殿の列卒に野猪鹿ゐどもくの獲物を扛擔しまする前駈後従の目まぶしく五町ばかり續妃けり既に遠く定正主従ハ白井の城まで二十町に足らぬ道の程の並松原を過る折とそれバ一個の武士の浪人皂蛇皮絹の単衣の申時なりゐるを被く編笠をあくまでもれバ年の齢ハ定かなれど道の西くくの左のくくなる年ゆく松の下の葛石に尻を掛く右手に含みくる一口の大刀をやをく膝に推立て忽地声を呼り立て世ホ千里の馬ゐるよあれど只これを知る伯樂なれのを今も鏌邪が劍なれよあれど只これを知る良将なれのを惜うかこの名刀屠児の肉俎に乗せられ農婦に鍋の炭を掻まれ恨むべしくと打返し又打かへしく頻に呼ばりおらける前走の雑色両三人も見く駐て立ちあを奇怪あり。

八犬傳五輯卷二
廿六
○山青堂藏


八犬傳五輯卷二
○山青堂藏

何人ぞ知らぬ管領の行倉より目今還らせ給ふる。ち馬前ゑ程近ゑ笠をも脱ぎ尻えくけくゆふ力を含みるハ礼儀ゑ疎ゑ白徒ゑとくく笠を脱捨てつゐて拜ゑなりぬぞと齊一叱懲らせども浮浪人ハ果敢々敷く見えりもせで冷笑ひ嘻咻やあるかゐ燕雀那ぞ大鵬の志を知るよしあんん管領ハゑと貴ゑ欲現汝達の主ゑれば貴ゑとゑ思ゑるべ。ちれども両管領ハ許我殿の舊老黨京都將軍ゑ家臣なり貴ゑハ將軍ゑ世ゑ貴ゑめハゑ。ちれぞもゑ上ゑ天子ゑ無上至尊ゑれども。その上ゑ宗廟在ゑ宗廟ハ是萬物の父母天津日月の神ゑ。ちれハ浮浪の武士ゑれば主もなく家隷もなー管領ゑれゑ恩德あるゐ貴くもゆべ管領ゑれゑ德なくゐれハゐぞ世を渡らんのこゝろの街道挾ゑなゐ。是一個の浮浪人がこの樹下ゑ憩ひしゑ路の障ゑあるゐゑ僻ゑ者ゑと思ひて初ゑ初ゑくいゑく高くゆきハ雑色ゑハもく怒りゑ大膽不敵の癖者ゑれゐゑ。

傳人打ゑ仕ゑと教園ゑ立ゑりゑる三方ゑり。懲らんと競ゑ程ゑ定正間近く馬を進ゑく驟ゑ伝ゑぞ彼鎮ゑと制ゑ。鐙際ゑ従ゑる松枝十郎をゑんゑりゑ云云と仰ゑれば十郎ハゑりゑ始果ゑ其樹下ゑ赴ゑ浮浪人ゑも對ひゑ其許ハ元来何処の人ぞゑ。

管領家の家ゑ向ゑんゑ使ゑ立ゑれゑ。御内の近臣松枝十郎貞ゑ誘ゑ前ゑ。とく急ゑハ浮浪人ハ阿ゑ応ゑ含ゑる刀を遠く腰刀ゑ挿添ゑ緒を解く笠を背のゑへ一間許投退けゑ初ゑ面を顯ゑ。その記人貪睛を斜めゑく遠近齊一ゑを望ゑ年齢ハ二十ゑ。三ゑハ過ぐゑ面色白ゑ髭鬚青ゑり眉ハ秀ゑ遠山のゑく眼ハ朗ゑ。雙星ゑ似ゑり隆準丹脣ゑれゑ。箇の子男子月額の延延黒ゑ。襲髪の額ゑ掠ゑ抉ゑ疑ゑる容儀堂々神表凛々膚人ゑ。ぞゑ。ける畢竟この人定正ゑ近ゑ。ゑ又甚麼ゑ説話ゑ。そハ次の巻ゑ解ゑ。

里見八犬傳第五輯巻之二終